



博士課程教育リーディングプログラム
免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム

NEWS LETTER



number 8
2017 summer



LGS
LEADING GRADUATE SCHOOL
AT CHIBA UNIVERSITY

国際シンポジウム

LGS5期生 小久保 幸太

2017年6月27日に開催されたInternational Symposium on Molecular Basis of Cancer Immunotherapyでは、千葉県にある幕張メッセに、ガン免疫学の最先端を走っている発表者の先生方をはじめとする世界中のガン免疫学研究者が集まりました。プログラムの内容は、演者の発表とそれに対する会場との質疑応答で構成されており、演者としてはChimeric Antigen Receptor (CAR) T cellを開発したことで知られるCarl H June先生や、臓器移植時の拒絶反応という斬新な視点からガン免疫を研究されているDonna Farber先生といったガン免疫学界を代表する研究者の方々がご参加くださいました。臨床的な内容と絡めた基礎研究のご講演が多く、様々なバックグラウンドを持つLGS学生全員の勉強となり、今後の自身の研究内容へと繋げることができる大変良い機会となりました。

またご講演後には、演者の先生方とLGS学生によるディスカッションの場が設けられました。そこではLGS学生の代表が自身の研究内容について発表を行い、その内容に関して先生方と学生全員によってディスカッションが行われ、最先端の研究者と自分たちの視点の違いを比較するという非常に貴重な経験をできました。先生方からの質問は常に鋭く本質を捉えており、さらに実用化への実現性を念頭に置かれた指摘が多かったように感じられました。これらの視点は、研究内容を社会へと還元できるレベルに到達させることを目標とする「治療学」を推進するリーダーとして養成されている我々LGS学生にとっても必須の視点であると思われました。



リーディング大学院説明会

LGS3期生 熊谷 仁

2017年6月17日(土)に、来年度の大学院入学希望者を対象として、リーディング大学院説明会を開催しました。

リーディング大学院の活動を多くの方々に広報すると同時に、リーディング大学院の魅力や学生からの生の声をお届けすることを目標としました。当日は休日にも関わらず、リーディングプログラムの説明を聞くために多くの方々にお集まり頂きました。3人のリーディング大学院生により、以下の如くプログラムの概略説明及び研修報告を行いました。

1) リーディング大学院プログラム説明

発表者：3期生 熊谷 仁

2) WHO研修

発表者：4期生 栗林 和華子

3) USA California研修

発表者：3期生 藤本 真徳

プログラム説明では概要のみならず、実際の学生生活に基づいた具体的な内容を織り交ぜてお話ししました。研修報告ではそれぞれの研修先の特色や身についたことなどをメインにお話しました。今回の説明会を通して、「未来のリーディング大学院生」に我々のプログラムの魅力を十分に伝えることが出来たと感じました。これからの世界を牽引すべく、我々と共にグローバルリーダーを目指す熱意に満ちた人材が数多く集うことを心待ちにしています。

グローバルリーダーを目指して
-The Challenge from Inohana-

博士課程教育リーディングプログラム
＜免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラム＞

日時	13:15～13:25
2017年6月17日(土)	＜リーディング大学院プログラム説明＞ 熊谷 仁 (博士課程3年)
13:15～13:45	＜海外研修報告＞ 13:25～13:39 WHO研修 栗林 和華子 (博士課程2年) USA California研修 藤本 真徳 (博士課程4年)
場所	千葉大学医学部1階 第一講義室
	13:39～13:45 ＜質疑応答＞

LGS
OF CANCER IMMUNOTHERAPY

お問い合わせ
リーディング大学院事務局 TEL:043-228-2817 E-mail: lgs@inohana.u.jp

理研サマープログラムについて

LGS4期生 古矢 裕樹

RIKEN IMS-Summer Programは理化学研究所で毎年開催されているサマーセミナーであり、免疫関連の基礎研究を行っている世界中の若き研究者を対象としたプログラムです。世界各国で活躍されている著名な19名の研究者の方を講師として招いており、免疫学関連の多岐に渡る最新のトピックスを学びます。進捗の著しい免疫学の分野において独学のみで全体を俯瞰することは困難ですが、このプログラムに参加することであらゆる免疫学のトピックスを効率よく学ぶことが出来ます。聴講者は世界中から42人まで絞られ、多くはセミナー期間に自身の研究内容に関連したプレゼンテーションとポスター発表を行い活発に意見を交換します。いずれの研究内容も非常に高度であり、世界の学生たちのレベルの高さを実感することができます。このプログラムで行われる内容を完全に理解しディスカッションをするには免疫系の基礎研究のバックグラウンドがないと難しく、ある程度の勉強や研究経験を積んだ上で参加することでより有効にこの機会を活用できると感じました。しかしながら知識の乏しい分野においてもこのプログラム参加を良い機会として関連論文を読み勉強して臨むことで自分の力に出来たと感じています。また日本にいないが世界各国の同年代の学生たちとともに過ごせる機会は非常に貴重であり、彼らの考え方や姿勢を肌で感じる事ができたのはとても良い経験になりました。とても良い機会ですので、まだ参加されたことのない学生にも是非参加を勧めたいです。



RIKEN Summer Programでの発表

LGS2期生 中川 誠太郎

横浜の理研において千葉大学リーディングプログラムとRIKENの共同で開催されているSummer program、RISP 2017に参加し、発表させていただきました。世界中から免疫学の研究を行なっている海外の大学院生や若手研究員が集まり、高名な免疫学者と共に過ごす内容の濃い4日間でした。発表を行った大学院生や若手研究員からは40名近い参加者が現在進行中のプロジェクトを英語で発表し、質疑応答を行いました。参加者たちの発表および研究内容のレベルは大変高く、また最新の技術を駆使したもの、地域の特性が出ている内容のものなど大変刺激的なものでした。私たち参加者の発表は全て講師の先生、司会進行をやっていただいたRIKENおよび千葉大学リーディングプログラムの先生から採点され、プログラム終了後に発表されるとあって、参加者は皆入念に準備を行いとても真剣に発表をしており、良い緊張感の中で過ごすことができました。自分の発表の時も大変緊張しましたが、私たちのチームが行なっている研究テーマは他の分野の研究者にとっても興味が出る内容であると自負して発表に臨みました。技術的な面では、リーディングプログラム内で開かれたEnglish presentationの授業で習得した技術が大変役に立ちました。特にpresentationで大切なこととして一番初めに教わった、“Stand up straight, be open.”という言葉は、今回もpresentationの上手な人は皆実践できており、私が人前で話す時にはいつも心がけていることです。幸運にも私は上位6名に選ばれて、“The Best Presentation Award”を受賞することができました。海外の同世代の研究者と同じレベルで切磋琢磨できて良い経験となったと同時に、今後海外に出て競争をしていくに当たって様々なことを感じ考える良い機会となりました。



LGS 学生の顔合わせ

LGS4期生 一色 佑介

2017年4月5日（水）、LGS新入生ガイダンスが開催され、新入生である5期生7名を含む、LGS学生及び関係教員らが参加した。

まずはじめにプログラムコーディネーターである斎藤教授より開会のご挨拶をいただき、新入生への期待の言葉が述べられた。続いて3期生の福田さんより、本プログラムの理念・カリキュラムの概要が説明された。その後、本プログラムの特徴のひとつである治療学科目やRIKENサマープログラムについて、担当教員より詳しい説明がなされた。説明の後、新入生には、合格通知書と白衣、パソコンが授与された。

引き続いて、3期生の優秀大学院学生表彰が行われ、ともに細胞治療内科学所属の熊谷 仁さんと藤本 真徳さんの2名が選出された。

その後、本プログラムの卒業要件のひとつとなっている、国内および海外研修の発表が下記の通り行われた。

- | | |
|------------------|---------------------------|
| 1) RIKENサマープログラム | (4期生：馬 敏) |
| 2) USAカリフォルニア研修 | (2期生：Eishika Dissanayake) |
| 3) WHO・ベルリン研修 | (4期生：栗林 和華子) |
| 4) Winter Camp | (3期生：中川 拓也) |

最後に、5期生の自己紹介が行われ、本プログラムに対する期待とこれからの抱負が述べられた。新しいスタートにふさわしく活気にあふれたガイダンスとなった。



5期生紹介



中嶋 隆裕

〈所属〉免疫発生学

●研究内容

病原性記憶Th2細胞の解析と臨床への応用

●目標

私はリーディング大学院プログラム（LGS）を通して様々な研究室の学生や教員の方達と交流し、今後研究を続けるにあたって様々な分野の方とのネットワークを構築できるよう努めていきたいと考えています。また現在の基礎研究をどう臨床に応用していくかが私の大きなテーマです。看護師であるバックグラウンドを生かして、これまでにない発想で研究・実践が行えるよう努めていきます。

●一言

LGSの学生は多種多様ですが高校や部活などで接点がある友人が多く、とてもリラックスして過ごせています。

栢森 健介

〈所属〉細胞治療内科学

●研究内容

リンパ腫発症におけるPolycomb repressive complex (PRC) 1.1の役割と機能解析

●目標

血液疾患の治療は新規薬剤の開発とともに大幅な進歩を遂げているが、多くの疾患は依然として難治である。近年、血液疾患の発症には遺伝子変異だけでなく、ヒストン修飾などエピジェネティックな異常が関わっていることが明らかになっている。エピジェネティックな発癌機構を解明することによりさらなる治療薬の開発につなげていきたい。

●一言

他分野の方々との交流により、深い洞察を得ていきたいと思います。またこの機会に英語力の向上を図りたいです。



小久保幸太

〈所属〉免疫発生学

●研究内容

喘息発症の原因候補遺伝子の探索とT細胞における機能解析

●目標

まず、第一の目標として、私は現在の研究内容を完結させて新規の喘息治療法を開発することを目指しています。そして、その知見より発展させて、異物に対する過剰な免疫応答（アレルギー反応）や、自己に対する免疫応答（自己免疫疾患）におけるT細胞の機能を軸とした新規治療方法を発見することが最終的な目標です。これらの目標を達成するには、自分の専門分野に偏らない視点から研究を行うことが重要になると思われますので、今後はLGSプログラムの中で様々なバックグラウンドを持った方々と関わっていきたいと考えております。

●一言

LGSの一員になれたことを誇りに思います。おかげさまで、素晴らしい指導教官の先生方、先輩、同輩に恵まれ、日々とても良い刺激を受けています。



山崎由里子

〈所属〉皮膚科学

●研究内容

皮膚常在菌のマウス経表皮感染モデルにおける認識機構の解明と宿主免疫応答の解析

●目標

免疫学はその基礎構造からまだ未解明の部分が多く、今現在医学の中で最も究明が望まれる分野の一つです。私は、免疫学との関わりが深く病態未知の疾患が多いことから皮膚科学を専門として選考しました。今は大学院に入り基礎研究の奥深さと面白さに触れる毎日を送っています。皮膚での免疫応答を明らかにし今はまだ根本治療のないアレルギー疾患に新しい解決策を見出す一助になればと夢を見えています。

●一言

まだ研究のスタートラインに立ったばかりですが、LGSプログラムで与えられる最先端の講義や知識を存分に吸収し研究者、治療開発者として世界基準に立てよう勉強を重ねたいと思います。



太田 陽子

〈所属〉分子腫瘍生物学

●研究内容

神経芽腫の増幅ALK遺伝子を標的としたPIポリアミドDNAアルキル化剤の開発

●目標

神経芽腫は、小児固形腫瘍のうち頻度の高い疾患であり、組織型により、最新の集学的治療を組み合わせてもいまだ50%未満の生存率しか得られない予後不良な腫瘍が存在します。そして、神経芽腫の予後にALK遺伝子が影響を与えることが知られています。そこで、ALK遺伝子を標的とした薬剤の開発が、予後の改善に有効と考えており、この研究が神経芽腫の治療につながることを期待しています。

さらに、現在取り組んでいる研究や授業等を通して、グローバルな視野で少しでも多くの知識を身につけたいと思います。

●一言

日々の積み重ねを大切に、実りある大学院生活を送りたいと思います。



粕谷 忠道

〈所属〉アレルギー・臨床免疫学

●研究内容

自己免疫疾患の発症、制御性T細胞の分化、およびIL-21の産生制御におけるSoxC分子の役割を明らかにする。

●目標

医師5年目（アレルギー・膠原病内科）でLGS5期生として入学致しました。基礎研究の経験はこれからですが、臨床現場で培ってきた経験を活かして研究をしていきたいです。また、LGSでは英語に力を入れているので、国際的に通用するスキルも身に付けられるように努力致します。

●一言

研究のことはまだまだ分からないことだらけですが、仲間と共に刺激し合って成長していきたいです。



南塚 拓也

〈所属〉細胞治療内科学

●研究内容

動脈硬化における転写因子Tcf21の機能解析

●目標

私は糖尿病の診療にかかわっていますが、最終的に致命的となるのは心筋梗塞などの動脈硬化性疾患です。死亡原因の多くの割合を占める動脈硬化性疾患の機序の解明を通して、患者さんに貢献し、自身の能力を向上していきたいです。

他分野の知見を得て、英語を使う機会もあるLGSのプログラムはとても魅力的で恵まれた環境になっています。

●一言

多くの研究者と交流し、英語力も向上できるように努力します。